

二〇一五年度

二月一日入試

国語 (50分)

注意 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。

2 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきり書きなさい。

3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。

4 問題のページは、1-1 から 1-13 まであります。

― 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

高校一年生の塚本みちるは母と弟の智と三人暮らし。夏休みに交通事故で重傷を負った母は歩くためのリハビリを拒否し、人が変わったようにすべてのことに後ろ向きになってしまっていた。そんななか、母の叔父に『三河湾チャリティ―100km歩け歩け大会』にエントリーされてしまったみちるは、自分には無理だとはかにする智への意地と、かつての母ならチャレンジをすすめるだろうという思いから、百キロを三十分以内で歩く大会に出場する。激しい疲労と足の痛みに耐えられなくなり何度もうけそうになるが、途中一緒に歩いた初老の宗方さんや、同年代の陽一(彼)との出会いによってリタイヤすることなく最後の四キロを迎えた。

最後の四キロは、海沿いの道だった。防波堤沿いにずっと歩いていく。ここは行きに通った道とは違っていた。

見えない道にきよろししながら歩いていると、少し前に、またも見知った背中が見えた。今度は、左足だけじゃなく、右足までかばっているようだ。さてはいつ、右足の水ぶくれもつぶれたな？

「おーい。」

「またあんたかよ。」

振り返った彼は、やっぱり仏頂面のまま言った。

「お友達ですか。」

「途中いっしょに歩いたんです。」

宗方さんに説明する。宗方さんは、それを楽しそうに聞いていた。自然と、三人で並んで歩く。

「ここ、ビクトリロードって言うんだと。」

彼はだれに言うともなくつぶやいた。すぐ横は海ということもあって、風が強い。

「親父が言ってた。」

「そんな呼び名があるんですか。知りませんでした。」

宗方さんが相槌を打つ。

ビクトリロード。百キロの最後、そこまで歩いてきた人だけが歩ける海岸線。だれかと勝負したわけじゃない。だれに勝ったわけでもない。体は疲労でくたくただし、足だって痛い。それなのに、心は心地よい達成感に包まれていた。

そのとき、ふと思いついた。そういえば、理由を聞いてない。

「宗方さん、『恵みの雨』って呼ぶ理由、教えてください。」

「それ、俺も聞いたことがある。」

「ああ、そういえばお話ししてませんでしたね。」

ゆっくりと歩を進めながら、宗方さんは話してくれた。

「人は困難が多ければ多いほど、より多くのことに気づくことができる。百キロの最中に、雨が降ったことで、さらに気づくことも増えるでしょう。それに感謝して、『恵みの雨』と、そう呼ぶんだそうです。」

「そうなんですか……。」

多くのことに気づかせてくれる、雨。確かに、そうかもしれない。雨だけじゃなく、百キロというとなん

もない距離を歩かなければ、気づかなかったこと、考えていなかっただろうことはいっぱいあった。

正直、三十キロの時点で宗方さんに名前の由来を聞いたとしても、そのころの私はきっと理解できなかったと思う。雨なんて、ただ迷惑なだけ。困難を増やしてどうするの？

でも今は『恵みの雨』の言葉の意味がずっと胸に落ちてきた。

長い道のりの途中、あきらめそうになったことなんてなんでもあったし、自分の境遇をただ呪って泣いたことだってあった。今はすべてがなつかしい。心の中のものもやめたものは消え、ただ感謝だけが胸にあった。

どれほどそうして歩いただろうか。不意にだれかが声を上げた。つられて顔を上げる。するとそこには、たくさんの人と、そして、百キロのゴールがあった。時計を見る。二時十分前だった。

間に合った。私は、私たちは、完歩できたんだ。

ほっとした。百キロの間じゅう、ずっと時間の不安と戦っていた。チェックポイントに着くのはいつも制限時間ギリギリだったし、歩いていても X で仕方がなかった。でも、間に合ったんだ。

「あんた、なに泣いてんだよ。気持ちわるいな。」

「……うるさいってば。」

ゴールを見たとなん、安心したのか、止めようといくら努力しても、あとからあとから涙があふれてきた。最初は、とうてい無理だと思っていたゴール。途中からやっと百キロという距離がおぼろげに見えてきて、最後には絶対たどり着きたい目標へと変わった、百キロ。それがついに、目の前にある。

私ひとりでは絶対になしえなかった、完歩。

苦しいとき、必ずだれかが支えてくれた。手を差し伸べてくれた。心が折れてしまいそうなとき、みんなが背中を押してくれた。だからこそ、私は今ゴールに向かって歩くことができる。百キロという長い道のりを、完歩することができるんだ。

「おめでとうございます！」

※ オレンジの服の人たちが、口々に言ってくれた。あたたかな拍手に包まれる。

いつだったか、学校のマラソン大会でギリギリでゴールしたとき、先生だけでなく、とっくの昔にゴールしていたクラスメイトまでもが口々に励ましてくれたけど、そのときはただ恥ずかしいだけだった。

ゴール後に苦しい呼吸をトトノえながら、本当はもう少し速く走れたかも、なんて思ってた。死にたいくらいいやな気分になった。

あのときは、走るのが遅い私をみんな見下してるんだな、だからがんばってなんて言うんだと卑屈なことを考えもしたけれど、今ならわかる。ならもともと本気で手を抜かずに走ればよかった、ただそれだけの話だったんだ。

そう、今ならばわかる。苦しいくらい、よくわかる。

おめでとうございます。その言葉が、これほどまでに嬉しいということ。

つらいとき、がんばってくださいという言葉がどれだけありがたいかということ。

そして、ありがとうという感謝の気持ち、これほどまでに深くてあたたかいということ。

涙なんて、真夜中にかれたと思っていた。ひとりの夜道で、苦しくて、いらついで、流した涙。それとはまったく違う、あたたかなものが頬を流れていく。

ゴールの瞬間を撮ってくれたけれど、私は万歳をしながら泣きじゃくったままだった。宗方さんも、初めて完歩に目をうるませている。彼も、ゴールで待っていたお父さんと抱き合っていた。お父さんはつい

に涙を流している。

「みちる。」

拍手とおめでとうの向こうから、不意に、名前を呼ばれた。ここに私の知り合いはいないはず、そう思いながら振り返る。するとそこには、いないはずの人がいた。

「……ママ？」

「みちる。」

車椅子に乗ったまま、確かに、私を見て、ママは私の名前を呼んだ。

「歩ききったのね。」

「ママ。」

ママが車椅子から、手を伸ばした。私はおそろおそろその手を握る。すると、ママはギュッと私の手を握り返してくれた。

「……よくがんばったわね。」

少しの間止まっていた私の涙が、今度こそ止まらなくなった。ママの前にしゃがみこみ、顔をぐしゃぐしゃにして泣きじゃくる私の頭を、優しくなでってくれる。

ああそうだ。私はずっと、ママにそう言われたかったんだ。

がんばりなさい。全力を尽くしなさい。そうなんでもなんとも言われ続けたけれど、ママが私のしたことほめてくれることはほとんどなかった。

ママの思うような結果を残せない私に、ママはいつも憐れむような、あきらめたようなため息をつくだけ。

そう、私はずっとそんなママにほめてほしくて、あきらめてほしくなくて、それでも結果を出せない、全力でなにかに打ち込めない自分に気づいていて、そんな自分に自分でもあきらめきっていたんだ。今までは。

「偉かったわ、みちる。」

「ママ……。」

だからこそ、ママが事故のあと、あきらめたのがなによりショックだった。いつも自信満々なママが、ママ自身をあきらめて努力をしなくなったことが悲しかった。

「……ママも歩いてよ……。」

涙でばやけて、ママの顔なんてわからなかったけど、とにかく私はそう言った。ママの手を強く強く握りしめる。

今のママにどれほどなにかが伝わってるかなんてわからなかったけど、言った。

ただ、ママにもう一度歩いてほしかった。自分の力で。どんなにリハビリがつかなくても、あきらめたりなんかせずに。

「ママが一生懸命がんばってるって、私また見たいよ。」

見上げたママは、涙でばやけた視界の向こうで、泣いていた。

「歩いてよ、お願いだから。」

また歩いて。また私のはるか先で全力で生きながら、私を叱ってほしい。そうやって私と智を、地球の引力よりもはるかに強い力で引っ張って。そしたらいつか、今度は私がママを引っ張れるくらい成長するから。だから。

私の手を、ママはただ強く握り返してくれた。

「ママ……。」

⑨
ママはまだ、死んじやない。

その手の強さを感じながら、そう思った。ママはどんな逆境もはねのける。苦しくったって全力でもがいて、がんばり続ける。だって、それが私のママだから。

「私はあなたを誇りに思う。」

⑩ ママが不意にはつきりと、そう言った。はっとして顔を上げると、ママの眼めに、数か月ぶりの光が見えた。ママがいる。久しぶりにママが帰ってきた。

「やめてよ、アメリカ映画じゃあるまいし。」

私はひたすら泣いて泣いて泣きじやくつてから、やっとのことでそう言った。

ママはそれを聞いて、いつもどおりの自信たっぷりの笑顔^{えがお}で、笑った。私もいつか、こんな顔で笑えるようになるかな。『私は私を信じる』って、言える日が来るかな。

いや、来る。絶対に来る。来るかな、なんて待つてるだけじゃ、いつまでも来ない。来るように変わるの
は、自分の努力次第。^{しだい}今ならそれが痛いほどわかる。

「ねえ私も、ママの娘だむすめってこと誇りに思うよ。」

涙をふいて、私も笑った。どんな顔になったかは自分ではわからないけれど、ママは、そんな私の顔を
見て、ゆっくりとうなずいた。

かたがわゆうこ
（片川優子）「100km!」より

※(注) リタイヤ 途中で棄権すること。

仏頂面 ぶつちようづら
ぶあいそうできげんが悪い顔つき。

オレンジの服の人——この大会を企画した会社の社員たち。

卑屈ひくつ 心がいじけて氣力がなくいやしいこと。

問一 線 a 「ナ」、b 「トトノ」を漢字に直しなさい。

問二——線①「ピクトリーロード」とありますが、ここを歩くみちるの気持ちを簡潔に表した部分を、文

中から八字以内でぬき出して答えなさい。

問三——線②「恵みの雨」つて呼ぶ理由」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～エ

の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア つらいときに雨が降ることによってさらにつらさが増すので、もうこれ以上苦しいことはない

思えてがんばれるから。

イ 苦しい時に雨が降ってもっと苦しい状態になったときにこそ、ふだんあたり前だと思っていたことが実はありがたいことだと気づけるから。

ウ　長い距離を歩き続けてくたにくたになったときに、雨が降ることによつて気持ちがちりかえられて少し楽になるから。

工 雨が降ると歩くペースが落ちて冷静に自分を振り返ることができるため、どんなにつらくても完歩に向けてがんばることができるから。

問四——線③「ずとんと胸に落ちてきた。」とありますが、「胸に落ち」るとはみちるのどのような様子を表したとえだと考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア「恵^{めぐ}みの雨」の言葉の意味に安心した様子。

イ「恵みの雨」の言葉の意味に納得した様子。なっとく

ウ「恵みの雨」の言葉の意味に興奮こうふんした様子。

エ「恵みの雨」の言葉の意味に驚いた様子。おどろ

問五——線④「私たちは、完歩できたんだ。」とありますが、みちるはなぜ自分が「完歩」できたのだと

考えていますか。その理由が述べられている一続きの三文を文中からぬき出し、その初めの八字を答えなさい。

問六

X

 にはこの時のみちるの気持ちを表す言葉が入ります。あてはまる二字の漢字を文中からぬき出して答えなさい。

問七——線⑤「そのときはただ恥ずかしいだけだった。」について次の1・2の問いに答えなさい。

1 「そのとき」の「私」はクラスメイトたちの励ましはげの言葉をどのように思っていたのですか。それがわかる部分を文中から二十字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

2 「そのときはただ恥ずかしただけだった。」とありますが、走り終わった後に「ただ恥ずかしただけ」の気持ちになったのはなぜだと「今」の「私」は考えていますか。文中の表現を使って、解答の「から」につながるように十五字以内で答えなさい。

問八——線⑥「あたたかなものが頬ほおを流れていく。」とありますが、この涙なみだはどのような気持ちで流した涙だと考えられますか。文中から二字でぬき出して答えなさい。

問九——線⑦「ママが私のしたことをほめてくれることはほとんどなかった。」について次の1・2の問いに答えなさい。

1 「私」の行動の結果に対し、「ママ」はどのような態度で接していましたか。文中から二十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

2 「ママ」はなぜ「ほめてくれ」なかったと考えられますか。文中の表現を使って次の文の
 にあてはまる十字以内の言葉を答えなさい。

みちるが

と思っていたから。

問十 ― 線⑧「いつも自信満々ママが、ママ自身をあきらめて努力をしなくなったことが悲しかった。」とありますが、「ママ」は何の「努力」をしなくなったのですか。解答さんの「努力」につながるように二字で答えなさい。

問十一 ― 線⑨「ママはまだ、死んじやいない。」とありますが、みちるにとって「ママ」が「死ん」でしまふという状態とは、「ママ」がどうなってしまうことですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア やる気をなくしてしまつたママが、みちるの前から姿を消してしまふこと。
- イ 自信を失つたママが、みちるを二度とほめてくれなくなる事。
- ウ ママが自分自身の可能性をあきらめてしまつて無気力になつてしまふこと。
- エ ママがみちるの行動すべてに対して否定的になつてしまふこと。

問十二 ― 線⑩「ママがいる。久しぶりにママが帰つてきた。」とありますが、事故にあう以前の「ママ」はどのような人物だったのですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 子ども思いで何事にも対しても一生懸命に取り組む、どんなにつらい状態にあつても投げ出さずに努力する人。
- イ 常にリーダーとしてみんなを引っ張つていくが、思うような結果を残せないときにはすぐにあきらめてしまふ人。
- ウ どんなときでもひたすら仕事の成功のために力を尽くし、子どもにも自分と同じように優秀であることを求める人。
- エ まじめに取り組まない人に対しては厳しく当たるが、全力で取り組む人には優しく手助けをしてくれる人。

問十三 この文章の内容を説明したものとしてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 百キロというとはうもない距離を歩くことによつて、それまでいろいろなことをすぐにあきらめていたみちるが自分の中の可能性に気づき、自分自身を信じて物事に取り組む大切さを学んだ。
- イ 百キロを歩ききつたことで全力を尽くすことの尊さを知り、事故ですべてに對して後ろ向きになつた母親に努力する姿を見せることで、もう一度がんばる気持ちを取り戻してほしいと考えた。
- ウ 百キロという長い道のりを多くの人に励ましてもらいながら歩いたことで、今まで想像したことのないくらいのつらさを味わうこととなった。
- エ 百キロを苦しみながらも歩いたことで初めて母親から認められ、自分がずっと願っていたことは尊敬する母親にほめてもらいたかつたことなどだと気づいた。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

世界の全体像や自分が生きていることの意味を知りたいと思う時期が、きみたちにも来るかもしれない。その説明のやり方として考えられてきたのが、神を持ち出してくるというやり方だった。つまり神が、世界や人間の運命をすべて決めているという物語を使うんだ。

だけど、科学技術などが進歩してくると、そういう説明では、どうしても納得できない人が出てきてしまふのは、きみたちにもよくわかると思う。ここから、神の物語の説明から離れて、人間の理性によつて説明してみようとの努力が始まつた。そのときからぼくたちは、初めて「哲学」を持つたと言えるんだ。

紀元前六世紀ころ、ギリシャのタレス(紀元前六四〇年ころ～五四六年ころ)が、すべての物は、水によつて成り立っていると主張したときに、それは始まつた。だつて、初めて世界を、神の物語を使つて説明するのではなく、自然界にある物やその原理によつて説明しようとしたからだ。彼らみたいな初期の哲学者たちは、このように自然界の成り立ちに、強い関心を示したため、現在では自然哲学者とよばれる。

紀元前五世紀になると、世間の関心が、人間社会へと移っていく。それにともなつてソフィストとよばれている人たちが、議論好きな市民たちのヨウボウに^a応えるために、各地から大都市のアテネに集まつてきた。ソフィストとは「知識人」を意味する言葉だが、彼らは、市民たちからたくさんのお金をもらつて、相手を説得する「コミュニケーション力」を知識として教えることを仕事にする。しかも、これを物事の真理を問うような知識とは関係ないたんなる技術として扱ひ、どうすれば相手を議論で打ち負かして、説得できるかという表面的な「ディベート術」として教えたんだ。

彼らが教えるこうした知識にたいして、一人の男が立ち上がる。

男の名前を、ソクラテスという。じつは、「思想犯」として、紀元前三九九年に死刑になつていふだけ[※]れど、弟子のプラトンが、彼を主人公にした本を何冊か書いている。中でも『ソクラテスの弁明』は大変有名で、死刑を宣告される裁判での彼の主張が詳しく紹介されているんだ。ソクラテス本人は本を何も残していないから、これは、彼の考え方を知る貴重な記録といつていい。

人間が、自分の命までかけて主張する思想つて、どんなものなんだろうか。彼の思想の中心である「X」の考え方について、少し詳しく見てみよう。

有名な話があるんだ。彼の友人が、神から「ソクラテスほどアタマのよい者はいない」という「お告げ」を受けたことがあつたと言ふんだ。いまのきみたちからみれば「おとぎ話」だと思ふだろう。でも當時は、人間と神との一体感がとても強く、こうした「おとぎ話」がいくつもつくられ、信じられていた。いまだつて、神様を信じている人びとがたくさんいる。だから、この点はそれなりには納得できると思う。

このことを友人から聞いたソクラテスは、自分にはそれほどの知識があるとは思つていなかったのだ、とても驚いたんだ。そしてその「お告げ」のほんとうの意味を確かめようと、當時のアテネで尊敬され「アタマがよい」と思われていた詩人や政治家、ソフィストなどを訪ね始める。

そこで彼は、その人たちの口から出る知識の一つひとつを問い直し、不確かなものをそぎ落としていく「問答法」をやっている。どんな方法かという、當時のアテネで知識人としてとても尊敬されていた詩人のところへ行き、その人がつくつた詩の内容について次々と質問を浴びせていくやり方なんだ。まるで何重にも包まれているような「知識」の皮を、遠慮のない質問によつて一枚一枚めくっていく。だれにでもわか

る詩人自身の言葉で、ほんとうに言いたいことが何なのかを明らかにさせたいと思ったんだろう。だけどその詩人には、そんなことはできないということがわかってくる。次の政治家を訪ねても、その次のソフィストを訪ねても無理だったんだ。

その結果、ソクラテスは気づいていく。周りから「知識人」として尊敬されている人たちの多くは、ある特定の技術に関する知識をもっているのは確かだけれど、そのことだけで自分は、すべてのことをよく知っていて、「アタマがよい」とうぬぼれているだけなのではないか。世間から「もの知り」と言われ、自分たちもそう思い込んでいる人びとは、じつは「表面的な知識」や「借りものの知識」を普通よりも多く身につけているにすぎないのではないのか、ということだ。

ソクラテスは、このような借り物の知識のことを「ドクサ」とよぶ。「ドクサ」とは、たとえば「おもしろい」ということについて考えてみると、ほんとうにそれがおもしろいかどうか自分で確かめもしないで、世間がおもしろいと言っているからとか、自分の頭で考えもせずに、有名な学者が書いたというだけで、その本の内容を、そのまま信じこむような（思い込み）のことを言うんだ。

Y テレビのワイドショーなどのゲストとして登場する学者や弁護士たちがいる。彼らの中には、自分のよく知らないテーマでも関係なく、ただ世間受けするようなコメントをするような人を見かけることもあるだろう。そうしたコメントの内容が、ここでいう「ドクサ」のイメージだと考えてもいいかもしれないね。

⑥ それじゃ、ソクラテスが考えるほんとうの知識とは何なのだろうか。

少しわかりにくいんだけど、その知識を得れば、人間一人ひとりがほんとうに幸福な思いに満ち、豊かに生きることができるようなものだというんだ。彼はこの知識のことをじつは「善美」という言葉で、仮に表現している。そして、その「善美」という知識が示す通りに行動できて、はじめて「善美」の一つの条件を満たすというんだ。断っておくけれど、この「善美」という言葉は、「悪や醜」に対する「善や美」という意味じゃない。それじゃ「善美」って、具体的にはどのようなものなのだろう。人の生き方に関わるものなら、その中身は一人ひとりによって違うのかもしれないし、よくわからないはずだね。

⑦ ところが多くの人びとは、「善美」がほんとうは何であるかわからないのに、「ドクサ」をほんとうの知識だと思い込んでいる。他人より少しでも多くの「ドクサ」を身につける競争ばかりに力を傾けて、人より賢くなったと錯覚しているとソクラテスは考えたんだ。

神のお告げの意味について、ソクラテスは最終的にこう理解したんだ。ほんとうの知識をもたないのにアタマがよいと思っている人びとと自分は、知識がない点では変わらない。ただ、一つだけ違うと思えるのは、自分にはほんとうの知識がないかわりに、その知識があるとも思っていない。少なくとも自分には、そのことへの「無知」だけは、はっきりと自覚している。でもそこが、じつはほんとうの知識を得るためのスタートであることを、神が教えたかったんじゃないかと。

⑧ この内容をあらわした有名な言葉が「無知の知」だ。この言葉のもっとも大切な点を、改めて確認しておこう。この場合の「無知」というのは「ドクサ」を含めた知識全体に対する無知のことじゃないんだ。知識を、ほんとうの知識である「善美」に限ったうえで、その中身が具体的に何なのか、いまだにわかっていないという「無知」のことなんだ。だから「無知の知」という言葉は、「知識一般を持っていないことを自覚している」という単純な謙虚さを表しているわけではない。知識の内容を根本的に問直し、ほんとうの知識である「善美」に内容を編み直したその一点に、彼は自分の生涯をかけたことを覚えておいてほしい。

（八塚憲郎・萩倉良「自分をつくるテツガク」より）

※（注）哲学——ものごとの、おおもとのわけや、理屈を研究する学問。
アテネ——ギリシャ最大の都市。

真理——だれにでも、いつでもどこでも正しいとみとめられることがら。
ディベート——賛成派と反対派の二つに分かれて議論を交わすこと。
思想犯——社会的に害のある思想に基づく犯罪、またはその犯人。

問一——線a「ヨウボウ」を漢字に直し、b「訪」、c「根本的」の読みをひらがなで答えなさい。

問二——線①「神の物語の説明から離れて、人間の理性によって説明してみようとの努力が始まった。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 ここでの「人間の理性」にあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 世界の全体像を科学的な方法で明らかにしようと考えること。
イ 自然界の成り立ちについて、筋道を立てて論理的に考えること。
ウ 世界は何らかの物質によって成り立っていると考えること。
エ 神が世界や人間の運命をすべて決めていると考えること。

2 「人間の理性」による「説明」として、初期の哲学者は何を用いましたか。文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

問三——線②「ソフィストとよばれている人たち」とは何を教えている人たちですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 良い人間関係を築くための会話の仕方を教えている人たち。
イ 物事の真理を問うような知識を教えている人たち。
ウ 相手を議論で打ち負かす技術を教えている人たち。
エ たくさんのお金をもうける方法を教えている人たち。

問四 本文中のXにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 議論 イ 真理 ウ 哲学 エ 知識

問五 — 線③「この点はそれなりには納得できると思う。」とありますが、「この点」とは何を指しますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 神から「お告げ」を受けたという友人の話を、ソクラテスが信じたこと。
イ 神の「お告げ」が存在するということを、現代の人々の多くが信じていないこと。
ウ 人間と神との一体感がとても強く、「おとぎ話」がたくさん作られていたこと。
エ 神からの「お告げ」が「おとぎ話」だと思われ、多くの人々に親しまれていたこと。

問六 — 線④「そんなことはできないということがわかってくる。」とありますが、「そんなこと」とはどんなことを指しますか。次の文の□にあてはまるように、文中から三十文字以上三十五文字以内でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

□をはっきりと言い表すこと。

問七 — 線⑤「このような借り物の知識のことを『ドクサ』とよぶ。」とありますが、「借り物の知識」とはどのようなことですか。答えとなる次の文の□にあてはまる言葉を、文中から十五文字以上二十文字以内でぬき出して答えなさい。

世間で言われていることをうのみにして、□。

問八 本文中の□Yにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア むしろ イ ところが ウ なぜなら エ たとえば

問九 — 線⑥「ソクラテスが考えるほんとうの知識とは何なのだろうか。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「ほんとうの知識」を、ソクラテスはどんな言葉で表していますか。文中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

2 ソクラテスが考える「ほんとうの知識」の性質としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「ほんとうの知識」を得ると、一人ひとりが豊かに生きることができるようなもの。
イ 「ほんとうの知識」が示す通りに行動できなければ、「ほんとうの知識」を得たことにならないもの。

ウ 人によって中身が違っても、具体的には何であるかよくわからないもの。

エ 世間から「もの知り」と言われている人々が持っている知識で、特定の技術に関するもの。

1-10

問十 — 線⑦「他人より少しでも多くの『ドクサ』を身につける競争ばかりに力を傾けて」とありますが、なぜ人々はこのような競争ばかりに力を傾けるのですか。解答らん「から」につながるように、文中から二十五文字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問十一 — 線⑧「『無知の知』」について述べたものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「ドクサ」のような知識にとらわれないほんとうの知識が何であるか知っていること。
イ 「知識人」と呼ばれる人々でも、ほんとうの知識の中身についてよくわかっていないこと。
ウ 「善美」の中身が具体的に何なのかわかっていないことを自覚していること。
エ 「ドクサ」を含めた知識一般を満足に持っていないことを知っていること。

問十二 次のア～エの中から本文の内容に合うものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア ソクラテスは、自分にはほんとうの知識がなく、他の人と何ら変わるところがないので、神のお告げは疑わしいものであると考えた。

イ ソクラテスは、ほんとうの知識を持つことは自分にも他の人にも絶対にできないということを問答法によって明らかにした。

ウ ソクラテスは、自分の生涯をかけて主張した思想を、『ソクラテスの弁明』として一冊の本に書き表した。

エ ソクラテスは、「無知の知」がほんとうの知識を得るためのスタートであることを、神が教えてくれたと理解した。

1-11

三 次の漢字と言葉に関する問いに、それぞれ答えなさい。

問一 次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字に直し、⑥～⑨の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 失敗をチヨウ消しにする働きだ。
- ② 船のコウ路を北にとって、さあ出発だ。
- ③ 国がサカえる。
- ④ 裏山の断ソウを地質学者が調べている。
- ⑤ 店頭にマネキ猫を置く。
- ⑥ 明晩もう一度うかがいます。
- ⑦ 二月の半ばに京都に行く予定だ。
- ⑧ 委細はあとで報告させていただきます。
- ⑨ 原因について深く思案する。

問二 次の①～③にあるア～ウの――線部の言葉の使い方として正しいものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ① ア はるか向こうの景色が、手にとるようにはつきり見える。
イ 父は生まれたばかりの娘を手にとるように大事にする。
ウ 私の母は手にとるようにくわしく話した。

- ② ア タバコのけむりがひどくいぶかしい。
イ 祖父は年々いぶかしくなっていく。
ウ あの人の行動にはいぶかしいところが多い。

- ③ ア 兄が会社を休むとはよくよくの事情があつてのことだ。
イ 先生は私たちによくよく宿題を忘れないように注意する。
ウ 電車の中で座席をゆずることをよくよく心がける。

問三 次の各文の□にあてはまる言葉として最も適当なものを後のア～クの中から選び、その記号を答えなさい。ただし記号は一度しか選べません。

- ① 正月が過ぎると□春がやってくる。
- ② この雪だと車も動かないので□お困りでしよう。
- ③ 彼女に勝つなど□無理な話だ。

ア どうやら イ けっして ウ さぞ エ せいぜい
オ ふいに カ さいわい キ やがて ク とうてい

問四 次の各文の――線部が直接かかっている部分はどこですか。それぞれぬき出して答えなさい。

- ① 森の 中を 一頭の こぐまが ひらひらと 飛ぶ ちようちよを 追いかける。
- ② ずっと 昔 まだ 母が 東京の 大学に 通っていた ころの 話だ。

問 四	問 二	問 一	
①	①	⑥	①
	②		②
	③		
	⑦		
	②		
②	問 三		③
①	⑧		④
②			
③			
⑨		⑤	

問 一	問 二	問 三	問 七	問 八	問 十二
a	1				
b	2	問 四		問 九	問 十二
				1	
		問 五		2	
		問 六		問 十	
			10		
				}	
		}	15		
					から。
					20
c	10				

問 十	問 九	問 七		問 五	問 一
	1	2	1		a
努力			}		b
	}				
問 十二					
					問 二
問 十二				問 六	
	2				
		10			
問 十三					
					問 三
		から。			
		問 八			
					問 四
	10				

国語解答用紙

受 験 番 号	
氏 名	